

# 最近のフランス大学入試制度の改革についての 一考察

宮 脇 陽 三

## 内容目次

### はじめに

- 一 一九八三年以降の第二段階大学入学資格試験制度の現状
- 二 一九八三年以降の技術者大学入学資格試験制度の現状
- 三 一九八七年以降の社会人対象の特別大学入学試験制度の現状
- 四 一九八三年以降の大学入学資格試験制度の運営の実情  
おわりに

### はじめに

フランスの大学入試制度は通常はバカロレア (Baccalauréat) またはそれを略称してバック (Bac) と呼ばれている。

さらにバカロレアは、(一)第二段階大学入学資格試験、略称は普通バックと、(二)技術者大学入学資格試験、略称は技術バックに分けること

ができる。そのほかに一九八七年以降に新設された社会人対象の、(三)特別大学入学試験 (Examens spéciaux d'accès aux études universitaires)、略称はESSEUがある。

バカロレアということばは、大学入学資格学位取得者 (バシユリエ bachelier) という称号を授与する大学の第一次学位を示している。もともとバカロレアということばの語源はバックカロリであり、「いちごや月桂樹の実」を示すことばであった。

それが、どうして大学入学資格学位取得者 (バシユリエ) をさすことばに変わったのかというと、中世のパリ大学では文科を卒業して上級の神学部、法学部、医学部への進学資格学位を取得した人は、大学人社会の身分階層としては準社会人とみなされ、バカラリウス (baccalarius) と呼ばれていたのが、面白半分にバックカロリと呼びかえられるようになり、一六世紀頃からは、それがフランス語風にバカロレアと呼ばれる慣例になったのである。

今日では、バックは、ナポレオン一世が一八〇八年に帝国の指導者階層を選抜するために設けた国家資格試験としてのバカロレアを創設

して以来、一八〇年の伝統をもった中等教育の一般教養教育を対象とする第二段階バカロレアと、一九六八年に新設された中等教育の技術教育を対象とする技術者バカロレアの二種類がある。

フランスは第二次世界大戦後、教育の大衆化が教育政策の基本理念となり、教育の機会均等を図るために、初等、中等、高等のすべての教育を、複線型から単線型の学校制度に転換してきた。したがって中等教育においても、本人の能力と適性に応じて、一般教養教育か専門職業教育かのいずれの課程を履修しても、その進路が袋小路ではなくて、高等教育への門戸が開放されることになったのである。

とりわけ画期的なことは、一九八七年に新設された特別大学入学試験(ESEU)である。これは満二〇歳以上で二年以上の職歴をもつ者や、満二二歳以上で所定の職歴をもつ者や、国内居住一年以上の外国人にも、試験の合格者に対して、バカロレア合格者とまったく同じ資格を与えるものである。今日のフランスは生涯学習社会時代を迎えて、大学の門戸開放に向って大きな一歩を踏み出したのである。

一九七五年「の教育基本法」に基づいて、前期中等教育は四年制のコレージュ(中学校)に一本化され、第二段階教育第一期課程と呼ばれている。後期中等教育はリセと職業教育リセに二分されており、第二段階教育第二期課程と呼ばれている。前者は以前のリセと技術リセが統合されたもので、三年制の第二期長期課程となっている。これは第二段階大学入学資格学位免状か、技術者大学入学資格学位免状を取得できる課程である。後者は以前の技術教育コレージュに相当し、二年制の第二期短期課程となっている。これは職業履修免状(B.EI.

P.)か職業適性証書(C.A.P.)を取得できる課程である。

かくして中等教育の第一期課程と第二期課程は、第一段階教育と呼ばれる初等教育に接続する課程であり、初等教育を修了したすべての生徒に開放された学校教育になっている。義務教育は満六歳で入学する小学校に始まり、リセか職業教育リセの第一学年までの一〇年間である。なお幼稚園(呼称は母親学校)から高校(リセ)までの授業料は無償である。

したがって中等教育は初等教育に接続するすべての生徒に開放された学校系統として位置づけられたのである。しかし中学校(コレージュ)と高等学校(リセ)の学年の呼称には、まだ複線型学校制度時代の名残が残っていて、高等教育に近い方から、リセでは高等専門大 schools 準備級、最終学級、第一学級、第二学級と呼ばれており、コレージュでも上級学年から下級学年へ向って、第三、第四、第五、第六学級と呼ばれているのである。

なおリセ併設の高等専門大 schools 準備級とは、普通バックのA科かC科などの合格者で、バックの成績評点が秀または優の者が、さらに二または三カ年間、総理府所管の国立行政学院(ENA)、国民教育省所管の高等師範学校(ENS)、国防省所管の理工科学校(エコール・ポリテクニク)など、大学以上の高い社会的威信をもっている大学院程度の高等専門大 schools (グラン・ゼコール)の入学試験の準備勉強をする学級である。

ナポレオン一世が一八〇八年にバックを創設した当初では、文学バックと数学・物理学バックの二種類だけであり、古典語、修辭学、歴

史学、地理学、哲学、数学、物理学について簡単な対話による口述試験だけであり、合格者も三二人だけであった。

その後、一八三〇年に国語、一八四〇年にラテン語、一八六四年に哲学の筆記試験が加わった。一九六〇年に体育が必須試験科目になり、徒走、重量投げ、綱登りの実技検定が行われるようになった。一九六九年から技術バックが新設された。一九七一年からはリセ第二学年末に国語の予測試験が新設された。一九八七年からは生涯学習社会の到来とともに、社会人対象の特別大学入学試験が新設された。

今日ではバックの受験者数は四〇万人に達するようになった。現代社会の要請と、国民大衆における教育の普及によって、バックは全部で二五学科に発展し、ますます複雑となり、多様化していく傾向を見せている。

受験者が一、〇〇〇人程度の時代にはバックの献立表も簡単なもので済んだが、四〇万人もの受験者が殺到する今日では、バックの献立表は、受験者の注文や趣向に合わせて多様化していかざるをえなくなっている。バックの複雑化と多様化は、受験者の学習の自由の代償であるといえることができるのである。

この小論では、この複雑で多様化したバックの二五学科について、(一)一九八三年以降の第二段階大学入学資格試験(普通バック)の現状と、(二)一九八三年以降の技術者大学入学資格試験(技術バック)の現状、ならびに(三)一九八七年以降の社会人対象の特別大学入学試験制度(ESEU)の現状について考察しようとするものである。

# 一九八三年以降の第二段階大学入学資格試験制度の現状

第二段階バック(普通バック)は全部で八学科あり、技術バックは全部で一七学科あるから、バックの専攻学科の総数は二五学科である。

この普通バックと技術バックとESEUの主要専攻科目と最低合格点は、「第1表」に示す通りである。

【第1表】1983年以降のフランス大学入試制度 (ただし特別大学入試は1987年以降)

種別	学科	類	主 専 攻 科 目	最低合格点
才入2学 段資 階格 大試 学験	A	1	古典語または外国語	230
		2	外国語	250
		3	芸術(音楽または造形美術)	270
	B		経済学・社会学	230
	C		数学・物理学	220
	D		数学・自然の科学	
技 術 者 大 学 入 学 資 格 試 験	F	D'	農学・技術学	280
		E	数学・技術学	240
		1	機械工学	250
		2	電子工学	270
		3	電気工学	250
		4	土木建築工学	
		5	物理学	240
		6	化学	230
		7	生化学・微生物学	200
		7 Z	生化学・細菌学	
		8	社会医療学	
		9	動力源・設備計画	250
		10	精密機械工学	250
		11または11 Z	音楽(器楽または舞踊)	120
		12	美術	240
	G	1	経営事務処理技術	170
		2	簿記経理	
		3	商業技術	
	H		情報処理技術	160
特別大学 入学試験	A		国語・外国語	40
	B		国語・数学	40

第二段階バカロレア、すなわち普通バックの8学科の試験内容は、〔第2〕第9表〕に示す通りである。

普通バックは全部で8学科である。A科は3学科ある。A科一類文理学科（古典語または外国語）、A科二類文学・外国語学科（外国語と、古典語または第二外国語）、A科三類文学・芸術学科（音楽または造形美術、古典語または外国語）の共通点は、古典語が選択科目として入っていることである。

B経済学・社会学科は外国語中心の文科系の学科である。したがって文科系の学科はA、Bの四学科である。

C数学・物理学とD数学・自然の科学科は理科系の学科である。

D'農学・技術学科とE数学・技術学科は技術系の学科である。

A科一類文理学科、A科二類文学・外国語学科、A科三類文学・芸術学科はギリシャ語・ラテン語など古典語教育中心のリセ、またB経済学・社会学科、C数学・物理学、D数学・自然の科学科は現代外国語教育中心のリセ、D'農学・技術学科は農業教育中心のリセ、E数学・技術学科は工業技術教育中心のリセの、それぞれ所定の最上級学年における所定教育課程を、バックの試験の対象にしているのである。

なお「自然の科学 (Science naturelle)」(35, 223) とは、いわゆる自然科学ではなく、生物学、遺伝学、食品・栄養科学、環境社会学、地質・地誌などの内容を総合した、人間を含む生物とその生存環境に関する包括的な理解を目的とした教科の名称である。

A科一、二、三類は文学教育中心の学科である。今日の科学技術の

〔第2表〕 1983年以降の第2段階大学入学資格試験（その1）

試 験 種 別			試 験 科 目	試験時間	配点指数	
バックA文理学科一類（第一外国語または古典語）専攻	第一群試験	A 予測 （第2学年修了時点で合格を要す）	筆 記	国 語	4 時間	3
			口 述		20分	2
		B （第3学年修了時点で合格を要す）	筆 記	(1)哲 学	4 時間	5
				(2)数 学	3 時間	4
				(3)歴史・地理	3 時間30分	3
	(4)第1 現代外国語 または古典語（選択）			3 時間	3	
C	口 述	(1)第1 現代外国語 または古典語 （ただし筆記試験で選択した言語に限る）	20分	3		
D	必 須	体 育				
第二群試験		口 述	受験した筆記試験科目の中から2科目選択			

〔第3表〕 1983年以降の第2段階大学入学資格試験（その2）

試 験 種 別			試 験 科 目	試験時間	配点指数	
バックA文理学科二類（第一・第二・第三外国語または古典語（専攻））	第一群試験	A予 測 （第2学年修了時点で合格を要す）	筆 記	国 語	4 時間	3
			口 述		20分	2
		B （第3学年修了時点で合格を要す）	筆 記	(1)哲 学	4 時間	5
				(2)歴史・地理	3 時間30分	3
				(3)第1 現代国語	3 時間	4
				(4)第2 現代国語 または第3 現代外国語 または古典語（選択）	3 時間	3
	C	口 述	(1)第1 現代外国語 または第2 現代外国語 または第3 現代外国語 または古典語	20分	3	
			(2)数 学	20分	2	
	D	必 須	体 育			
	第二群試験		口 述	受験した筆記試験科目の中から2科目選択		

〔第4表〕 1983年以降の第2段階大学入学資格試験（その3）

試 験 種 別			試 験 科 目	試験時間	配点指数	
バックA文理学科三類（芸術）専攻	第一群試験	A予 測 （第2学年修了時点で合格を要す）	筆 記	国 語	4 時間	3
					口 述	20分
		B （第3学年修了時点で合格を要す）	筆 記	(1)哲 学	4 時間	5
				(2)歴史・地理	3 時間30分	3
				(3)芸術教育 （音楽または造形美術）	3 時間	3
				(4)現代外国語 または古典語	3 時間	3
	C	口 述	(1)数 学	20分	2	
			(2)芸術教育実技 (3)現代外国語 または古典語（筆記試験で選択しなかった科目）		3	
D	必 須	体 育				
第二群試験		口 述	受験した筆記試験科目の中から2科目選択			

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

〔第5表〕 1983年以降の第2段階大学入学資格試験（その4）

試 験 種 別			試 験 科 目	試験時間	配点指数
バ ツ ク B （経済学・社会学）科	第一群試験	A 予 測 （第2学年修了時点で合格を要す）	筆 記	4 時間	3
			口 述	20分	1
		B （第3学年修了時点で合格を要す）	筆 記	(1)哲 学 4 時間	3
				(2)歴 史・地 理 3 時間30分	3
				(3)経済学・社会学 4 時間	4
				(4)数 学 3 時間	3
				(5)第1現代外国語 3 時間	3
	第二群試験	C	口 述	第2現代外国語 または古典語	3
		D	必 須	体 育	
			口 述	受験した筆記試験科目の中から2科目選択	

〔第6表〕 1983年以降の第2段階大学入学資格試験（その5）

試 験 種 別			試 験 科 目	試験時間	配点指数
バ ツ ク C （数学・物理学）科	第一群試験	A 予 測 （第2学年修了時点で合格を要す）	筆 記	4 時間	2
			口 述	20分	1
		B （第3学年修了時点で合格を要す）	筆 記	(1)哲 学 4 時間	2
				(2)数 学 4 時間	5
				(3)物 理 学 3 時間	5
				(4)歴史・地理 3 時間30分	2
				(5)自然の科学 3 時間	2
	第二群試験	C	口 述	現 代 外 国 語	3
			必 須	体 育	
			口 述	受験した筆記科目の中から2科目選択	

〔第7表〕 1983年以降の第2段階大学入学資格試験（その6）

試 験 種 別			試 験 科 目	試験時間	配点指数	
バ ツ ク D (数学・自然の科学) 科	第 一 群 試 験	A 予 測 (第2学年修了時点で合格を要す)	筆 記	国 語	4 時間	2
					口 述	20分
		B (第3学年修了時点で合格を要す)	筆 記	(1)哲 学 (2)歴史・地理 (3)数 学 (4)物 理 学 (5)自然の科学	4 時間	2
					3 時間30分	2
					4 時間	4
					3 時間	4
					3 時間	4
	C	口 述	現代外国語		3	
	必 須					
第 二 群 試 験		口 述	受験した筆記試験科目の中から2科目選択			

〔第8表〕 1983年以降の第2段階大学入学資格試験（その7）

試 験 種 別			試 験 科 目	試験時間	配点指数	
バ ツ ク D' (農学・技術学) 科	第 一 群 試 験	A 予 測 (第2学年修了時点で合格を要す)	筆 記	国 語	4 時間	2
					口 述	20分
		B (第3学年修了時点で合格を要す)	筆 記	(1)哲 学 (2)歴史・地理 (3)物 理 学 (4)数 学 (5)生 物 学	4 時間	2
					3 時間30分	2
					3 時間	3
	C	口 述	(1)現代外国語 (2)経 済 学 (3)農学・技術学	4 時間	3	
				3 時間	4	
第 二 群 試 験		口 述	受験した筆記試験科目の中から2科目選択			

〔第9表〕 1983年以降の第2段階大学入学資格試験（その8）

試験種別			試験科目	試験時間	配点指数
バツクE （数学・技術学）科	第一群試験	A子測 （第2学年修了時点で合格を要す）	筆記	4時間	2
				口述	1
		B （第3学年修了時点で合格を要す）	筆記	(1)哲学 4時間 (2)数学 4時間 (3)物理学 3時間 (4)機械工学 4時間	2 5 4 4
				(1)技術実技 (2)現代外国語	3 3
			必須		
	第二群試験		口述	受験した筆記試験科目の中から2科目選択	

発達した時代では、フランス文化における過度な文学偏重の傾向は批判されている。それゆえ、ごく控え目な姿勢でラテン語などの古典文学教育の若返りが図られており、ラテン語は必須科目となっていない。しかしフランスは古代ローマ帝国のラテン語古典文明の遺産の正統な継承者としての自尊心を持っているから、いちおうラテン語を選択科目の位置へ後退させているが、実際にはA科一類文理学科でラテン語を履修した者で、バックで二〇点満点のうち一六点以上を得点した優秀な者は、リセの高等専門大学校準備級に進学して、高等師範学校文科か国立行政学院などをねらうことができるのである。

(1) A科一類文理学科（外国語ならびに古典語か第二外国語専攻）  
これは一八〇八年のバック創設時の文学バックの正統な継承学科である。ただし今日の科学技術全盛時代における国際貿易競争という社会情勢にかんがみて、理学系の数学を、A科一類で週当たり5時間の配当をしている。バックでの数学の配点指数も4である。したがって文学・数学科とも呼ばれている。

必須選択科目はラテン語、またはギリシャ語、または第二外国語である。

生徒の進路は、厳密な学問性と数学の学力を必要とする交換や通信のあらゆる分野（歴史学、社会学、心理学、経済学、法律学、社会学、準医療職）である。

(2) A科二類文学・外国語学科（外国語と、古典語または第二外国語）

これは国籍にとらわれない学科である。浴室でなくても英語の歌を



歌うことが好きであり、世界の寒帯の凍土地域であれ、南洋のやしの樹陰であれ、世界中を旅行したり、セルバンテスの『ドン・キホーテ』を原典で読みたい人に適している学科である。この学科で身につけた現代外国語の学力は、世界旅行にあたってつねに便利な旅券として役立つのである。

実際には三カ国語が必須科目である。第一外国語のほかに、第二外国語か古典語か地方語の中から二つの言語が必須科目である。

生徒の進路は、A科一、二、三類に共通の文学関係の職業のほかに、管理的業務の秘書、通訳、翻訳者、観光、国際法関係の業務などである。

### (3) A科三類文学・芸術学科

これは絵筆をふるうことが好きな人や、音楽または造形美術の愛好者向きの学科である。

必須科目はラテン語またはギリシャ語または第二外国語から一科目と、音楽教育または造形美術または建築芸術から一科目の合計二科目である。

進路は音楽または造形美術の分野か、それともそれらの芸術と多少のかかわりのある業界（装飾、流行服飾、広告、産業意匠）である。

なおA科一類、A科二類、A科三類のリセの第二、第三学年における週当り授業時数は、〔第10表〕に示す通りである。

### (4) B経済学・社会学科

これは、経済が現代社会の推進力となっているため、目下、人気上昇中の学科である。

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

〔第10表〕 A科1、2、3類の週当り授業時数

科 目	科・類		A 科 1 類		A 科 2 類		A 科 3 類	
	文 理 学 科		文学・外国語学科		文学・芸術学科			
	第 2	第 3	第 2	第 3	第 2	第 3	第 2	第 3
数 学	5	5	2	2	2	2		
物 理	1 ½		1 ½		1 ½			
自 然 の 科 学	2		2		2			
歴 史 ・ 地 理	4	4	4	4	4	4		
国 語	5		5		5			
哲 学		8		8		8		
第 1 外 国 語	3	3	3	3	3	3		
第 2 外 国 語	3	3	3	3	3	3		
(古代語または現代語)								
音 楽 教 育 又 は 選 択 造 形 ・ 建 築 芸 術 体 育					4	4		
	2	2	2	2	2	2		
合 計	25 ½	25	22 ½	25	26 ½	26		

必須選択科目はラテン語またはギリシャ語または第二外国語である。

進路はA科一類とほとんど同じである。

経済学や商学を履修するのに適している。

B経済学・社会学科の高校の第二、第三学年における週当り授業時

数は、〔第11表〕に示す通りである。

〔第11表〕 B科の週当り授業時数

科・類	B 科	
	経済学・社会学科	
	第 2	第 3
数 学	5	5
物 理 学	1½	
自 然 の 科 学	2	5
哲 史 ・ 地 理	4	4
国 語	4	
第 1 外 国 語	3	3
才 2 外 国 語 (古代語または現代語)	3	3
経 済 学 育	4	5
体 育	2	2
合 計	28½	27

(5) C 数学・物理学科

これは一八〇八年の数学・物理学バックの伝統を継承する学科である。リセの第三学年では数学は週当り9時間もある。リセの第一学年の選択必須科目は数学の記号φが示すように何もない。φの記号は数学を学習しに來なさいと親愛なまばたきをしているのである。

C科はバックの全部で二五学科があるなかで、最も社会的威信の高い学科である。C科合格者の三一パーセントは理学に進学し、四〇パーセントはリセ併設専門大学準備学級へ進級し、高等師範学校理科や理工科大学校(エコール・ポリテクニク)の難関へ挑戦する。

しかしC科でバックに合格したとしても、必ずしもバラ色の人生を約束しない。バックC科合格免状は魔法の杖ではない。並みの才能で

大変な努力によって辛うじて獲得したバックC科合格免状は、実力で悠々と合格した他のバックの学科の合格免状に匹敵しないのである。  
C 数学・物理学科の高校の第二、第三学年における週当り授業時数は、〔第12表〕に示す通りである。

〔第12表〕 C、D、D' 科の週当り授業時数

科 目	科 学 年	S 科		C 科		D' 科	
		理 科		数 学 ・ 物理学科		農 学 ・ 技術学科	
		第 2	第 3	第 2	第 3	第 2	第 3
数 学		6	9	6	6	6	6
物 理 学		5	5	5	5		4
応用物理学・化学						4	
自 然 の 科 学		2½	2	2½	5	3	3
歴 史 ・ 地 理		4	3	4	3	2	2
国 語		4		4		4	
哲 学			3		3		3
才 1 外 国 語		3	2	3	2	3	2
技 術 教 育						10	
専 門 教 育							11
体 育		2	2	2	2	4	4
合 計		26½	26	26½	26	36	36

なお高校第三学年のC科とD科へ進級するためには、第二学年では

S 科、つまり理科 (Science) を履修するのである。

(6) D 数学・自然の科学科

C 科より数学の配当時間は、週当り三時間少ない。それでも数学は六時間もあり、物理学は C 科と同じく週当り五時間である。「自然の科学」は週当り五時間で C 科よりたつぷりと配当されている。

C 科よりもバックの合格率も高いため、一九七六年以後、多数の D 科履修者が増加してきている。

進路は実験科学、とくに医学、薬学、準医学的分野、高等教育の全分野である。

D 数学・自然の科学科の高校の第二、第三学年における週当り授業時数は、「第12表」に示す通りである。

(7) D' 農学・技術学科

これは農業リセ (lycée agricole) に設けられている学科である。

農業リセは農業省の管轄であり、国民教育省の管轄ではない。

私立農学校も多数あり、D' 農学・技術学科の生徒の六〇パーセントは私立農業高校の在籍者である。

農業リセと私立農業高校は高校の第一学年から農業指導を行うことになっており、第二学年で週当り一〇時間、第三学年で週当り一一時間と大幅な専門技術教育が行われている。

D' 農学・技術学科の高校の第二、第三学年における週当り授業時数は、「第12表」に示す通りである。

(8) E 数学・技術学科

一般教育では C 科に匹敵する数学九時間、物理学五時間の週当り配

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

当であり、技術学の週当り配当時間は一一時間であるから、F 科二類電子工学科並みである。C 科の週当り授業時数二六時間に対して、E 科ではそれが三二時間に達している。

それゆえ E 数学・技術学科の履修にあたっては、普通バックと技術バックの両面作戦を遂行できるだけの筋肉と脳髓の灰白質と神経の動員が必要となるのである。

進路は C 数学・物理学科の場合と同じである。理学 (工学系) と技術短期大学部 (IUT) へ進学する。しかし世評は C 数学・物理学科ほど高くはない。

E 数学・技術学科の高校の第二、第三学年における週当り授業時数は、「第13表」に示す通りである。

〔第13表〕 E 科の週当り授業時数

科 目	E 科	
	数学・技術学科	
	第 2	第 3
数 学	6	9
物 理 学	5	5
哲 学		3
歴史・地理	2	
国 語	4	
才 1 外国語	3	2
体 育	2	2
技 術 学	12	11
合 計	34	32

E 数学・技術学科の「技術学」では、理論教育と同じくらい、工業製図、工場実習などの実際教育も行われている。

二 一九八三年以降の技術者大学入学資格  
試験制度の現状

技術者バカロレア、すなわち技術バックの一七学科の試験内容は、  
〔第14〕第30表〕に示す通りである。

技術バックは全部で一七学科である。

技術バックには、工業系がF科一類から六類までの六学科と、F科  
九類と同一〇類の二学科を合わせて八学科である。医療系がF科七類、  
同七類乙、同八類の合わせて三学科である。芸術系はF科一類と同  
一二類の二学科である。商業系はG科一、二、三類の三学科である。

情報処理系はH科の一学科である。

このうち世評が高い学科は、工業系ではF科一類機械工学科とF科  
二類電子工学科である。商業系ではG科一類経営事務処理技術学科と  
G科二類簿記経理学科の二学科である。情報系のH科情報処理技術学  
科も今日の情報化社会の到来とともに注目を集めている。

もともとフランスでは一般教養教育は専門職業技術教育よりも人格  
陶冶面で重視されてきたために、技術バックは普通バックと比べると、  
世間的には肩身の狭い思いをしてきたのである。しかしアビ改革によ  
って、一九六八年に技術バックが登場して以来、それまでの専門職業  
資格免状は続々と技術バックの中へ吸収統合されることになり、技術  
バックはますます多様化し発展していく傾向を見せている。

技術バックに合格した技術バシユリエは、普通バックに合格したバ

〔第14表〕 1983年以降の技術者大学入学資格試験（その1）

試 験 種 別				試 験 科 目	試験時間	配点指数
バ ッ ク F 科 一 類 （ 機 械 工 学 科 ）	第 一 群 試 験	A 一 級 教 育 試 験	A 予 測 （ 第 2 時 点 を 要 す ） 測 修 合 （ 年 度 点 要 ）	国 語	4 時間	各 2
					20分	
			筆 記 口 述	数 学	4 時間	5
				現 代 外 国 語	20分	2
		B 専 門 職 業 試 験	筆 記	機 械 工 学	3 時間	3
				試作または設計図	6 時間	6
			実 技	製 作 実 技	2 時間30分	5
		C	必 須	体 育		
	第 二 群 試 験	A 一 般 教 育 試 験	口 述	物 理 学	各20分	} 各 4 5
				国 語		
				数 学		
		B 専 門 職 業 試 験	筆 記	製 作 試 作	各 4 時間	各 4
				製作用具試作		
			口 述 ・ 選 択	技 術 学		
				機 械 工 学	20分	3

（注）第11表以降はA予測の（ ）内を省略する。

【第15表】 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その2）

試 験 種 別					試 験 科 目	試験時間	配点指数
バックF科二類（電子工学科）	第一群試験	A一般教育	予 測	筆 記	国 語	4 時間	各 2
				口 述		20分	
			筆 記		数 学	4 時間	5
			口 述		現 代 外 国 語	20分	2
		B専門職業	筆 記		(1) 物 理 学 (2) 技術系統の試作	4 時間 6 時間	5 6
			口 述 (関係書類による)		電 子 工 学 設 計	30分	5
	第二群試験	C	必 須		体 育		
		A選択教育	口 述		(1) 国 語 (2) 数 学	{ 各20分	4 5
			実 技		物 理 学	3 時間	5
		B選択専門職業	口 述 (関係書類による)		技術系統の試作	20～30分	6
			実 技		電 子 工 学 設 計	2 時間	5

【第16表】 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その3）

試 験 種 別					試 験 科 目	試験時間	配点指数
バックF科三類（電気工学科）	第一群試験	A一般教育	予 測	筆 記	国 語	4 時間	各 2
				口 述		20分	
			筆 記		数 学	4 時間	5
			口 述		現 代 外 国 語	20分	2
		B専門職業	筆 記		(1) 物 理 学 (2) 製作設計試作 (3) 設 備 試 作	3（時間） 4 3	各 3
			実 技		製 品 試 作 ・ 検 査	2 時間30分	5
	第二群試験	C	必 須		体 育		
		A一般教育	口 述		(1) 力 学 (2) 国 語 (3) 数 学	{ 各20分	3 4 5
			実 技		(1) 測定・試運転 (2) 技 術 学 (3) 模 型 図	6（時間） 各 3	各 3
			口 述		物 理 学	20分	3

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

〔第17表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その4）

試 験 種 別				試 験 科 目	試験時間	配点指数	
バックF科四類（土木建築工学科）	第一群試験	A一般教育	予 測	筆 記 口 述	国 語	4 時間	各 2
						20分	
			筆 記		数 学	4 時間	5
			口 述		現 代 外 国 語	20分	2
		B専門職業	筆 記	(1) 応用機械工学・ 材 料 抵 抗 (2) 製 造 設 計 (3) 開 発 設 計	3（時間） 4 6	各 4 6	
				体 育			
	第二群試験	A一般教育	口 述		(1) 物 理 学 (2) 国 語 (3) 数 学	各20分	4 4 5
			選 択 口 述				
		B専門職業	筆 記		(1) 製作設計工学・ 材 料 工 学	3 時間	6
					(2) 主題別懸賞作品 (3) 法 規	2 ～ 3 時間 1 時間	3 2
			選 択 口 述		(4) 応用機械工学・ 材 料 抵 抗	20分	4

〔第18表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その5）

試		験		種		別		試 験 科 目		試験時間		配点指数	
バックF科五類（物理学科）	第一群試験	A一般教育	予	測	筆	記	国	語	4 時間 4		2		
					口	述			20分		1		
			筆		記				(1) 哲 学	3（時間）	1		
			口		述				(2) 数 学	4	6		
						現 代 外 国 語	20分	2					
		B専門職業	筆		記		(1) 物 理 学	} 各 4 時間	} 各 4				
	実		技		(2) 電 気 学								
	第二群試験	C	必		須		電 気 学 実 験	2 時間					
							体 育						
			A一般教育	口		述		(1) 化 学	} 各20分	} 各 3 6			
								(2) 国 語					
		B専門職業	実		験		(1) 物 理 学 測 定	} 各 3 時間30分	} 各 5				
実			技		(2) 電 気 学 測 定								
					組 立	5 時間							
口			述		物理学または電気学	20分	4						

〔第19表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その6）

試		験		種		別		試 験 科 目		試験時間		配点指数	
バックF科六類（化学科）	第一群試験	A一般教育	予	測	筆 記	口 述	国	語	4 時間		2		
									20分		1		
			筆	記	(1) 哲 学	3（時間）		1					
					(2) 物 理 学 ・ 数 学	4		6					
		口	述	現 代 外 国 語		20分		2					
				B専門職業	筆	記	(1) 化 学	4（時間）		4			
	(2) 化 学 実 験 技 術	3					3						
	(3) 技 術 学 ・ 製 図	4		4									
	C	必 須		体 育									
	第二群試験	A一般教育	口	述	(1) 数 学	各20分	各 3						
(2) 国 語													
(3) 物 理 学													
B専門職業				(1) 分析化学・物理化学	5（時間）	各 5							
				(2) 準 備 ・ 組 立									
(3) 半分大実験室または 文献調査・タイピスト実習室	5	各 4											
(4) 化 学	4												
				20分									

〔第20表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その7）

試 験 種 別		試 験 科 目		試験時間	配点指数		
バックF科七類（生化学・微生物学科）	第一群試験	A一般教育	予 測	筆 記	国 語	4 時間	2
				口 述		20分	1
		筆 記	(1) 哲 学	3（時間）	1		
			(2) 生理学・化学	4	4		
		口 述	現 代 外 国 語	20分	2		
		B専門職業	筆 記	(1) 生 化 学	4（時間）	4	
	(2) 生化学実験技術			} 各 3	} 各 3		
	(3) 微 生 物 学						
	C	必 須	体 育				
	第二群試験	A一般教育	筆 記	物 理 学 ・ 数 学	3 時間	} 各 3	
口 述			(1) 国 語	} 各20分	4		
B専門職業			(1) 生化学・化学			}各5(時間)	6
			(2) 準 備 ・ 組 立	5			
(3) 微 生 物 学	4	4					
	口 述	生 化 学	20分	4			

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

〔第21表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その8）

試 験 種 別				試 験 科 目	試験時間	配点指数	
バ ッ ク 科 科 七 類 乙 (生化学・細菌学科)	第 一 群 試 験	A 一 般 教 育	予 測	筆 記	4 時間	2	
				口 述		1	
			筆 記		(1)哲 学 (2)生 理 学 ・ 化 学	3 (時間) 4	1 4
		B 専 門 職 業	口 述		現 代 外 国 語	20分	2
			筆 記		(1)微生物学・一般免疫学 (2)生 物 学 実 験 技 術 (3)生化学・生化学実験技術	4 (時間) 各 3	4 各 3
			C	必 須		体 育	
	第 二 群 試 験	A 一 般 教 育	筆 記		数 学 ・ 物 理 学	3 時間	各 3
			口 述		(1)国 語 (2)生 理 学 ・ 化 学	各 20分	
		B 専 門 職 業			(1)細 菌 学 (2)血 液 学 , 免 疫 学 , 血 清 学 ま た は 組 織 学 的 ま た は 細 胞 学 的 ま た は 寄 生 虫 病 学 的 技 術 (3)生 化 学	各 5 (時間) 4	5 6
			口 述		微生物学・一般免疫学	20分	各 4

人  
文  
學  
論  
集

〔第22表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その9）

試		験		種 別		試 験 科 目		試験時間	配点指数
バック F 科八類 (社会医学科)	第一群試験	A 一般	予 測	筆 記	国 語	4 時間	2		
				口 述		20分	1		
			筆 記		(1)自然科学・化学 (2)哲 学	各 3 時間	4 1		
			口 述		現 代 外 国 語	20分	2		
			B 専門職業	筆 記		(1)社会医学科 (2)医療技術学 (3)タイプライター実習	3 (時間) 2 4	} 各 3 4	
		C		必 須		体 育			
		B 専門職業	A 一般教育	口 述		(1)数学・物理学 (2)選択国語 (3)選択自然科学・化学	} 各20分	} 各 3 4	
				口 述		(1)実習報告書の提出・討議 (2)法制経済問題の討議			} 各20分
			実 技		文献資料・タイプライター実技	3 時間			
			口 述		選択社会医学科	20分			

三  
六



【第23表】 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その10）

試 験 種 別					試 験 科 目	試験時間	配点指数
バックF九類（動力源・設備計画学科）	第一群試験	A一般教育	予 測	筆 記	国 語	4 時間	各 2
				口 述		20分	
			筆 記		数 学	4 時間	5
		B専門職業	口 述		現 代 外 国 語	20分	2
			筆 記		応用流体・熱力学	3 時間	各 4
			試 作 実 技		(1)設 備 図 示 備 (2)設 備 図 示 備	4 (時間) 8	
	第二群試験	C	必 須		体 育		
		A一般教育	口 述		(1)物 理 学 (2)国 語 学 (3)数 学	各20分	各 4 5
		B門 職業	口 述		設 備 技 術 学	2 (時間)	各 2
			実 技		実 地 作 業 試 作	3	
			筆 記		(1)建築材料力学・抵抗力学 (2)社会法規・建築法規	各 2	3
			口 述		応用流体力学・応用熱力学	20分	各 4

【第24表】 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その11）

試 験 種 別					試 験 科 目	試験時間	配点指数
バックF科一〇類（精密機械工学科）	第一群試験	A一般教育	予 測	筆 記	国 語	4 時間	各 2
				口 述		20分	
			筆 記		数 学	4 時間	5
		B専門職業	口 述		現 代 外 国 語	20分	2
			筆 記		応用機械工学・応用光学	3 (時間)	3
			実 技		(1)試 作 また は 設 計 図 作 (2) 製 作	6 2時間30分	6 5
	第二群試験	C	必 須		体 育		
		A一般教育	口 述		(1)材 料 物 理 化 学 (設備選択) (2)電 気 工 学 (3)機 械 工 学 (光学選択のみ) (4) 国 語 学 (5) 数 学	各20分	1 3 (設備 選択) 2 (光学 選択) 4 5
			実 技		(1)設 備 ・ 製 作 試 作 (選 択 別) (2)製 作 ・ 調 整 (3)技 術 学	各4(時間) 3	4 5 各 3
			口 述		応用機械工学・応用光学	20分	
		B専門職業					

〔第25表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その12）

試 験 種 目		試 験 科 目		試験時間	配点指数		
バックF科一類・一類乙（音楽学科器専攻・舞踊専攻）	第一群試験	A一般教育	予測	記述	国語	4時間	2
						20分	1
			筆記		数学および物理学または哲学	4時間	各2
		口述		現代外国語	20分	〃	
		B専門職業	筆記	音楽実技	楽器選択者 舞踊選択者	4（時間） 3	各3
				楽器演奏または舞踊実技（選択）			
			実技				
	筆記	音楽史	4時間	2			
	C	必須	体育				
	第二群試験	A一般教育	口述	(1)数学および物理学または哲学 (2)芸術史・文明史 (3)選択国語または選択哲学・数学・物理学		各20分	各2
				3			
		各2					
		B専門職業	器楽選択者	筆記	音楽または声楽 器楽音譜速読	4時間 30(分) 10	各2
				実技			
			選択口述		器楽演奏	20	4
舞踊選択者			実技	舞踊法即席実技 または舞台装飾 または課題舞踊 または即席実技または分解	各30(分) 10 15 20	各2	
	選択口述	舞踊演技	20	4			

人 文 学 論 集

〔第26表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その13）

試 験 種 別				試 験 科 目	試験時間	配点指数	
バックF科一二類（美術科）	第一群試験	A一般教育	予 測	筆 記 口 述	国 語	4 時間	2
						20分	1
			筆 記	(1) 数 学 (2) 哲 学	{各3時間	4 1	
				口 述		現 代 外 国 語	20分
		B専門職業	筆 記	(1) 美 術 ・ 文 明 (2) 応用美術構成 (主 題 別)	3（時間） 8～12	4 6	
				口 述 対 談	作 品 記 録	20分	4
			C	必 須	体 育		
	第二群試験	A一般教育	口 述	(1) 物 理 学 (2) 選 択 国 語 または選択数学 (3) 選択美術・文明	各20分	} 各3 } 各4	
				B専門職業			筆 記

三 八

〔第27表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その14）

試 験 種 別					試 験 科 目	試験時間	配点指数
バック G 科 一 類（経営事務処理技術学科）	第一群試験	A 一般教育	予 測	筆 記	国 語	4 時間	2
				口 述		20分	1
			筆 記		(1) 哲 学	3（時間）	1
					(2) 企 業 組 織	2	2
			口 述		現 代 外 国 語	20分	3
		B 専門職業	筆 記		(1) 経済学・企業組織	2（時間）	2
					(2) 事例研究（管理技術）	5	6
	第二群試験	C	必 須		体 育		
		A 一般教育	口 述		(1) 一 般 経 済 学	各20分	3
					(2) 法 学		2
		B 専門職業	口 述		(3) 選 択 国 語 または管理組織		3
					選 択 経 済 学 ・ 企 業 組 織		各 2

〔第28表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その15）

試 験 種 別					試 験 科 目	試験時間	配点指数
バック G 科 二 類（筆記経理学科）	第一群試験	A 一般教育	予 測	筆 記	国 語	4 時間	2
				口 述		20分	1
			筆 記		(1) 数 学	2（時間）	3
					(2) 哲 学	3	1
			口 述		現 代 外 国 語	20分	2
		B 専門職業	筆 記		(1) 経済学・企業組織	2（時間）	2
					(2) 事例研究（管理の量的技術）	5	6
	第二群試験	C	必 須		体 育		
		A 一般教育	口 述		(1) 一 般 経 済 学	各20分	3
					(2) 法 学		2
		B 専門職業	口 述		(3) 選 択 国 語 または 選 択 数 学		3
					選 択 経 済 学 ・ 企 業 組 織		2

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

〔第29表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その16）

試 験 種 別					試 験 科 目	試験時間	配点指数
バ ッ ク G 科 三 類 （商業技術学科）	第 一 群 試 験	A 一 般 教 育	予 測	筆 記	国 語	4 時間	2
				口 述		20分	1
		筆 記			(1) 数 学	2（時間）	2
					(2) 哲 学	3	1
		口 述		現 代 外 国 語	20分	3	
		B 専 門 職 業	筆 記		(1) 経済学・企業組織	2（時間）	2
					(2) 事 例 研 究 （ 商 業 技 術 ）	5	6
	第 二 群 試 験	C	必 須		体 育		
		A 一 般 教 育	口 述		(1) 一 般 経 済 学	各20分	3
					(2) 法 学		2
		B 専 門 職 業	口 述		(3) 選 択 国 語 または選択数学		3
					選択経済学・企業組織		2

人  
文  
學  
論  
集

〔第30表〕 1983年以降における技術者大学入学資格試験（その17）

試 験 種 別					試 験 科 目	試験時間	配点指数
バ ッ ク H 科 （情報処理技術学科）	第 一 群 試 験	A 一 般 教 育	予 測	筆 記	国 語	4 時間	2
				口 述		20分	1
		筆 記			(1) 数 学	2（間）	2
					(2) 哲 学	3	1
		口 述		英 語	20分	2	
		B 専 門 職 業	筆 記		(1) 経済学・管理技 術	3（時間）	3
					(2) 事 例 研 究 （ 情 報 処 理 技 術 ）	5	5
	第 二 群 試 験	C	必 須		体 育		
		A 一 般 教 育	口 述		(1) 物 理 学	各20分	2
					(2) 選 択 国 語 または選択数学		3
		B 専 門 職 業	口 述		(1) 情報処理技術・ 情報処理方法		2
					(2) 選択経済学・選 択 管 理 技 術		各 3

シュリエと同じように国立大学への入学資格学位を取得すると同時に、就職にあたってそれまでの専門職業資格免状とは格段に高い上級専門職業資格免状を取得できる短期または長期の高等教育への門戸が生涯にわたって全国のおいずこにおいても開放されることになった。

普通バックのバシュリエとちがつて、技術バシュリエは技術バシュリエの免状だけでも、いざ公職や企業に就職する時には、高い社会的威信をもつ技術者免状の取得者として処遇されるのであるから、うらやましがられているのである。

技術バックは、(一)普通バックの古典系免状と同じく高度の一般教養水準を公認するものである。そのうえ(二)短期または長期の高等教育を履修できる資格を与えるものである。

例えば、2カ年の短期高等教育では「上級技術者免状」(B・T・S・)と、技術短期大学部(I・U・T・)修了証書と同格の大学工学履修免状(D・U・T・)が取得できる。

3年以上の長期高等教育では、大学の理学(工学系)教育・研究単位で履修して理学士号か、技師養成高等専門学校で履修して技師(ingenieur)免状か、または高度の専門大学校準備級へ進学して高級技師免状をねらうこともできる。

仮りに高等教育でより高い技術免状を取れなくても、いつでも公職や企業の職場へ中級技術者(technicien)の資格と大学入学資格学位取得者(bachelier)の称号でもって就職することができる。

ところで技術バックの、このような表面的な利点のかげに隠れた欠点もある。まず第一に技術バックに直結する技術系の各学科は、特別

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

の実習や実験の施設と設備をもった学校にしか設置されていないことである。中学校(コレージュ)時代から進路指導によって、どの学科へ進学するかが、毎学年末の成績によって決定される。その際にそれぞれの技術系学科の入学定員というわく組があるから、必ずしも生徒の第一志望の学科へ進学できるとは限らない。

第二に技術系の各学科の教育課程は、リセの第一学年の始めからきわめて狭い専門職業技術中心で編成されている。技術系の各学科の週当り授業時数は二三時間から三六時間にもわたっており、満腹状態である。それゆえ生徒は過重な学習負担にあえぐようになり、ゆとりを失って、狭い専門職業技術の殻の中に閉じこもりがちになりやすいのである。

#### (1) F科一類機械工学科

一九八〇年一〇月三十一日付け省令によるリセの第一学年における必須選択科目として、「工業技術」(週当り一一時間)を履修しなければならない。

進路は機械の工作、設計、材料、計測、制御に係る鉄鋼、自動車、航空機、農機具などの企業である。

リセの第二、第三学年におけるF科一類の週当り授業時数は、「第31表」に示す通りである。

#### (2) F科二類電子工学科

これは工業系では優等生が集中する学科である。工業系で最優秀の成績をあげた生徒にしか、この学科への進級が認められない。したがってF科二類のバックの高等教育における成功率がいちばん高いので

〔第31表〕 F科1、2、3、4類の週当り授業時数

科・類 科目	F科1類		F科2類		F科3類		F科4類	
	機械工学科		電子工学科		電気工学科		土木建築工学科	
	第2	第3	第2	第3	第2	第3	第2	第3
数 学	4	3 ½	4	3 ½	4	3 ½	4	3 ½
物 理 学	3	4	8	10	6 ½	7	3	4
歴 史 ・ 地 理	2		2		2		2	
国 語	3		3		3		3	
第 1 外 国 語	2	2	2	2	2	2	2	2
体 育	2	2	2	2	2	2	2	2
構 造 設 計 実 習	8	8	6	6	6	6	8	8
着 工 ・ 準 備 ・ 組 織	4	5	4	5	3	6	6	7
完 工 ・ 検 査	8	10	5	6	4 ½	8	6	8
合 計	32	34 ½	36	34 ½	33	34 ½	36	34 ½

ある。

必須選択科目はF科一類と同じである。

進路は電気設備に関係する航空機、電気通信、建設、電気製品、家庭電化商品の保修などの企業である。

F科二類の週当り授業時数は、〔第31表〕に示す通りである。

(3) F科三類電気工学科

必須選択科目はF科一類と同じである。

進路は電気工学に関係した企業、研究所、試験所、検査所、製作所である。

F科三類の週当り授業時数は、〔第31表〕に示す通りである。

(4) F科四類土木建築工学科

必須選択科目はF科一類と同じである。

進路は公共土木事業、不動産、道路、港湾、空港の建設に関係する企業の設計者や工事現場の監督者である。

F科四類の週当り授業時数は、〔第31表〕に示す通りである。

(5) F科五類物理学科

リセの第一年における選択必須科目として「実験科学および技術」(週当り授業時数一一時間)を履修しなければならない。

進路は物理学関係の装置の使用と保修に関係する工業試験所、冶金、製鋼、製鉄の企業である。

F科五類の週当り授業時数は、〔第32表〕に示す通りである。

(6) F科六類化学科

必須選択科目はF科五類と同じである。

F科五類に類似の学科であるが、化学の分析実験に重点を置いている。

進路は化学工場および工業関係企業の研究所である。

F科六類の週当り授業時数は、〔第32表〕に示す通りである。

【第32表】 F科5、6類の週当り授業時数

科・類 学年 学科 科目	F科5類		F科6類	
	物理学科		化学科	
	第2	第3	第2	第3
数学	5	5	4	3½
理論物理学	8		3	
物理学		7		1
化学	1	1		4
歴史・地理	2		2	
哲学		2		2
国語	3		3	
第1外国語	2	2	2	2
体育	2	2	2	2
図・技術学	4	2	3	3
応用物理学	9		3	3
応用化学			8	9
合計	36	21	30	29½

(7) F科七類生化学・微生物学科  
必須選択科目はF科五類と同じである。

リセの第二学年は生物学科と呼ばれているが、第三学年ではF科七類生化学とF科七類乙生物学とに専攻が分化する。

進路は食品貯蔵、ビール醸造、製薬、石油および石油誘導体に関係する企業の試験所や研究所である。

F科七類の週当り授業時数は、「第33表」に示す通りである。

(8) F科七類乙生化学・細菌学科

F科七類乙はF科七類（ダッシュ）とも呼ばれている。微生物学が週当り一〇時間もある。

必須選択科目はF科五類と同じである。

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

【第33表】 F科7類、7類乙の週当り授業時数

科・類 学年 学科 科目	F科7類		F科7類乙	
	生物学科	生化学・微生物学科	生化学・細菌学科	生化学
	第2	第3	第2	第3
数学	3	2	3	2
理論物理学	5	3	5	2
歴史・地理	2		2	
哲学		2		2
国語	3		3	
第1外国語	2		2	
体育	2	2	2	2
物理学実験	6	8	6	1
生理学	1	2	1	3
生化学	7	9	7	6
微生物学	5	4	5	10
血液学				5
合計	36	32	36	33

進路は公衆衛生検査所、病院の疫学的検査部門や防疫研究所である。

F科七類乙の週当り授業時数は、「第33表」に示す通りである。

(9) F科八類社会医療学科

リセの第一学年の選択必須科目として、「医療・福祉科学」（週当り一一時間）を履修しなければならない。

進路は医療関係分野における医師や放射線検査技師などの秘書である。この学科には女性生徒が圧倒的に多いために、「看護婦」や「保母」のバックと誤解されてきたが、病院における病人の介護業務は正

確には男女両性に開放されているのであるが、実際には女性の専業であつた。

看護婦の業務は本来の病人の介護という業務のほかに、医師などの業務の補助や、医師の会合の予約を記録したり、歯科医師の治療器具の消毒や整理や用意などの秘書的な業務もある。それゆえバックF科八類は決して医療関係分野での看護婦のバックではなくて、秘書のバックなのである。

F科八類の週当り授業時数は、〔第34表〕に示す通りである。

【第34表】 F科8類の週当り授業時数

科・類 科目	F科8類	
	社会医療学科	
	第2	第3
数 学	3	2
物 理 学	2	2
応 用 物 理 学	1	
歴 史 ・ 地 理	2	
経 済 学		2
哲 学		3
国 語	2	
第1外国語	2	2
体 育	2	2
生 物 学	4	4
生 体 医 学	11	11
生 理 病 理 学		3
医学専門用語		
合 計	30	31

(10) F科九類動力源・設備計画学科

リセの第一学年での選択必須科目はF科一類と同じである。

進路はF科四類土木建築工学科と非常によく似ている。F科四類とのちがいは、水道、ガスなどの鉛管の配管工事とか、公衆衛生設備工事、屋根工事、熱絶縁体設備工事、動力源調整工事が専門であるということである。

F科九類の週当り授業時数は、〔第35表〕に示す通りである。

【第35表】 F科9、10A、10Bの週当り授業時数

科・類 科目	学 科 専 攻 学 年	科9類類		F科10類A		F科10類B	
		動力源・設備 計画学科		精密機械工学科		光学専攻	
				設備計画専攻			
		第2	第3	第2	第3	第2	第3
数 学		4	3 ½	4	3 ½	4	3 ½
物 理 学		3	4	3	4	8	10
歴 史 ・ 地 理		2		2			
国 語		3		3		3	
第1外国語		2	2	2	2	2	2
体 育		2	2	2	2	2	2
構造設計実習		12	12	8	8	5	5
着工・準備・組織		3	4	4	5	2	2
完工・検査		5	7	8	10	8	10
合 計		36	34 ½	36	34 ½	34	34 ½

(11) F科一〇類精密機械工学科（A設備計画専攻・B光学専攻）

この学科は労働雇用市場での世評は高い。しかし、この学科を設置しているリセはまだ僅少である。パリ市、サルセル市、ナント市、モレ市のリセ各校にすぎない。

リセの第一学年での必須選択科目はF科一類と同じである。

進路は時計工場、航空機産業、宇宙空間産業における測定装置の製作所や実験所、また写真、光学材料の設計施行に関係する企業である。



F科一〇類の週当り授業時数は、「第35表」に示す通りである。

(4) F科一類音楽学科器楽専攻・舞踊専攻

これは素人音楽愛好者のための学科ではない。リセの第一学年での選択必須科目として芸術（音楽）（週当り四時間）を履修しなければならない。

この学科はごく少数のリセにしか設けられていないから、バックF科一類は狭い門である。そのうえ普通教育の数学などの学問的才能と、専門職業教育のピアノ実技などの芸術的才能の二つの天分に恵まれている場合には不運である。

なおリセの第二学年から器楽専攻と舞踊専攻に分化する。

進路は教育界と興業界である。とくに興業界で花形となるための競争は激甚である。

F科一類の週当り授業時数は、「第36表」に示す通りである。

(3) F科一二類美術学科

リセの第二学年における応用美術学科は、一九八三年九月の新学期から設置された。したがって一九八五年六月の試験期からバックに登場した新顔の学科である。

この学科を設置しているリセはまだ少数である。

リセの第一学年における必須科目は「応用美術の専門技術」である。

進路は絵画、彫刻、陶芸を各人が選択して、それぞれの美術に関係している職場である。

このバックの合格は応用美術関係の高等専門学校への受験資格にな

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

【第37表】 F科12類の週当り授業時数

科・類 学科 学年		F 科 12 類	
		美術 学 科	
		第 2	第 3
科 目			
数 学		3	3
物 理 学		2	3
歴 史 ・ 地 理		2	
哲 学			3
国 語		3	
第 1 外 国 語		2	2
体 育		2	2
応 用 美 術		21	
美術理論・実技			24
合 計		36	37

【第36表】 F科11類の週当り授業時数

科・類 学 年		F 科		11 類	
		音楽学科器楽専攻		音楽学科舞踊専攻	
		第 2	第 3	第 2	第 3
科 目					
数 学	学 史 語 習 譜 析 史 法 学 奏 譜 奏 術 学	4	3	4	3
物 理	代 世 界 入 門 学 史 語 習 譜 析 史 法 学 奏 譜 奏 術 学	2	2	2	2
現 代	理 学 史 語 習 譜 析 史 法 学 奏 譜 奏 術 学	1	4	1	4
哲 学	術 文 明 外 国 語 補 習 譜 析 史 法 学 奏 譜 奏 術 学	1	1		1
芸 術	1 外 国 語 補 習 譜 析 史 法 学 奏 譜 奏 術 学	4	3	4	3
国 語	学 史 語 習 譜 析 史 法 学 奏 譜 奏 術 学	3	2	3	2
第 1 外 国 語	舞 踊 記 述 法 採 分 舞 踊 記 述 法 採 分	5	5	5	5
体 育	舞 踊 記 述 法 採 分 舞 踊 記 述 法 採 分		1	5	1
応 用 美 術	舞 踊 記 述 法 採 分 舞 踊 記 述 法 採 分	1 ½	1 ½	1 ½	1 ½
美術理論・実技	舞 踊 記 述 法 採 分 舞 踊 記 述 法 採 分	2 ½	2 ½	1	1
合 計		26 ½	30	29 ½	30 ½

る。

F科一二類美術学科の週当り授業時数は、〔第37表〕に示す通りである。

(14) G科一類経営事務処理技術学科

リセの第一学年における必須科目はない。しかし経営（週当り五時間）、タイプライター操作技術（週当り二時間）などの履修が勧告される。

リセの第二学年では一九八三―八四年学年度以降では、それまでのG科一、二、三類に代ってG科だけが設けられている。第二学年末の進路指導によって、生徒はG科一、二、三類の三学科からいずれかの一学科だけを選択するのである。

進路は速記者兼タイピスト兼秘書である。B経済学・社会学科系の公務員行政職員採用試験を受験できるし、高等教育短期教育課程の商業技術短期大学部に進学して、技術高等証書（DUT）を取得することができる。

G科一類の週当り授業時数は、〔第38表〕に示す通りである。

(15) G科二類簿記経理学科

これは「経営の数量的経営学科」とも呼ばれているが、「経営の数量的経営」とは簿記のことである。

リセの第一学年での必須科目は、G科一類と同じ扱いである。

進路は製造工業および商業関係企業の会計業務である。公務員行政職試験を受験できるし、簿記関係の高等教育短期教育課程に進学することもできる。

〔第38表〕 G科1、2、3類の週当り授業時数

科 目	G 科		G 科 1 類		G 科 2 類		G 科 3 類	
	簿記経理学科		簿記経理学科		簿記経理学科		簿記経理学科	
	第 2	第 3	第 2	第 3	第 2	第 3	第 2	第 3
数 現 代 世 界 知 識	1 ½	2	1 ½	2	1 ½	2	1 ½	2
哲 学	2	1 ½	2	1 ½	2	1 ½	2	1 ½
国 語	3	3	3	3	3	3	3	3
外 語	3	3	3	3	3	3	3	3
1 外 国 語 育	3	3	3	3	3	3	3	3
体 育	2	2	2	2	2	2	2	2
経 済 ・ 法 制	6	5	6	5	6	5	6	5
経 営 ・ 商 業 方 法	2	3	2	3	2	3	2	3
商 業 技 術	3	9	3	7	3	7	3	7
経 営 の 数 量 的 技 術 (タイプライター)	3	4	3	6	3	6	3	6
通 信 機 器 ・ 操 作 技 術	3	4	3	6	3	6	3	6
応 用 情 報 処 理 実 習	3	4	3	6	3	6	3	6
応 用 商 業 技 術 実 習	3	4	3	6	3	6	3	6
合 計	28½	29½	28½	29	28½	29	28½	29

G科二類の週当り授業時数は、〔第38表〕に示す通りである。

(16) G科三類商業技術学科

これは生産物の商品化とか販売方法について履修する学科である。

リセの第一学年での必須科目はG科一類と同じ扱いである。進路は商業技術短期大学部に進学して、技術高等証書（DUT）を取得することができる。就職では大規模小売店、商品卸売業、貿易商社などの企業がある。

ただし労働市場では、商業従事者の活躍は本人自身の活力とか想像力、また対人関係での社交性などの資質が決め手となるのである。

G科三類の週当り授業時数は、「第38表」に示す通りである。

(17) H科情報処理技術学科

これは大型電子計算機による情報処理技術を履修する学科である。約三〇校のリセだけが、この学科を設置している。

リセ第二学科での必須科目は英語である。

第二学年と第三学年では外国語はとくに英語が指定されているからである。

進路は大型電子計算機を設置し使用している企業でのプログラマーまたは操作者の職種である。確実にそれらの職場に就職するためには、高等教育短期教育課程に進学して、上級技術者免状(BTS)、または技術高等証書(DUT)を取得しておくのが有利である。  
H科の週当り授業時数は、「第39表」に示す通りである。

【第39表】 H科の週当り授業時数

科 目	H 科	
	情報処理技術学科	
	第 2	第 3
数 学	5	5
応 用 物 理	2	3
現 代 世 界 知 識	2	
哲 学		2
国 語	3	
英 語	2	2
体 育	2	2
経済学・経営技術	5	6
情報処理方法	5	5
情報処理技術	2	2
情報応用技術	4	5
合 計	32	32

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

三 一九八七年以降の特別大学入学試験  
制度の現状

一九八六年一〇月一日付けの国民教育省令によって、一九八七年一月一日以降、特別大学入学試験制度(Examens spéciaux d'accès aux études universitaires)略称E.S.E.Uが新設された。

この試験は、少なくとも2年以前から学業を中断していた社会人を対象として、次のような条件を満たした者に、受験の機会を提供し、国立大学への門戸を開放しようとするものである。

(一) 受験資格 受験資格には二種類がある。その一は、(一)受験年度の一月一日に少なくとも二〇歳に達していること、(二)社会保険適用の職歴に二カ年従事を証明できる者である。その二は、(一)受験年度の一〇月一日に少なくとも二四歳以上であること、(二)次に示すような職務に従事した者も、社会保険適用の職歴に相当すると認められる。

- ①兵役、②児童教育、③公共職業安定所の職業紹介による雇用登録、④青年職業訓練施設への入所、⑤高度スポーツ活動。

フランスの国内に居住している外国人も、前記の条件を満たしておれば、フランス国籍を有する者と同等に、受験資格を認められる。

さらに本人がフランス国内に最小限一カ年の滞在を許可されているか、または両親もしくは配偶者が最小限三カ年の滞在を許可されていて、前記の条件を満たしている場合にも、受験資格が認められる。

ただし大学区総長は、大学学長の具申によって、受験者が受験年度

の一〇月一日に二〇歳に達しているならば、前記の諸条件の全部または一部の免除を決定することができる。

(二) 試験科目 試験科目は、「第40表」に示す通りである。

〔第40表〕 1987年以降の特別大学入学試験

試験種別		試験科目	配点指数
A 科 (文科系)	必須	(1)国 語 (2)外国語	各 1
	選 択	(1)現代史 (2)地 理 学 (3)数 学	より 2 科目 各 1
B 科 (理科系)	必須	(1)国 語 (2)数 学	各 1
	選 択	(1)物理学 (2)化 学 (3)自然科学・ 生命科学	より 2 科目 各 1

A 科の合格者は、大学入学資格学位（バック）を取得していなくても、高等教育における文学、芸術、人文科学、社会科学、言語、通信、法学、経済学、経営、管理の各領域を履修することができる。

B 科の合格者は、高等教育における理科学問、工学、体育・スポーツ活動、医学、歯学、薬学、診療補助部門の各領域を履修することができる。

試験科目は必須科目と選択科目に分れているが、必須科目は一般教養、選択科目は高等教育の履修に必要な専門知識を対象としている。

したがって受験者は受験登録に先立って、大学教員と面接し、選択科目として、どの科目を選択するかについて話し合うことになる。

試験科目は全部で四科目である。

試験は試験官の監督のもとに個別で受験する。筆記試験科目が少なくとも一科目は含まれていなければならない。

採点は、各試験科目ごとに二〇点満点で、平均一〇点以上が合格である。したがって最低合格点は、A 科とB 科ともに、平均四〇点である。

A 科の必須科目の国語では、フランス文学とフランス文明についての基礎知識、原典の解釈と分析を通じて、受験者の思考力や、論文や文体の質が評価される。

B 科の必須科目の国語では、原典の要約の説明と分析を通じて、受験者の言語能力の熟練度や思考力の推理力の質が評価される。

(三) 試験委員会 試験委員会の委員は大学学長によって指名されるが、委員長は大学の教授か講師か助講師の中から大学区総長によって指名される。

受験者は、A 科とB 科のいずれかの科について、同じ試験期に四科目の全部を受験することもできるし、それ以後の試験期に、残りの一部の試験科目を自分で選択して受験することができる。

ただし受験期間は最初の受験年度から四年を越えることはできない。

それぞれ異なる受験年度に、ある科目で二〇点満点で一〇点以上の

評点の取得者は、当該科目の合格点を、いずれの大学区の受験場においても、四年以内に限って繰り越すことができる。

ただし事情によっては、大学学長は、さらにもう一年の猶予を、例外的に認めることができる。なおこの措置は、A科とB科について、それぞれ別個に適用される。

(四) 受験の手続き 受験者は、同じ試験年度において、一カ所の受験場にしか受験登録することができない。

受験者が二回以上の試験期にまたがって、異なる試験場で受験する場合には、以前の試験場で受験して合格した試験科目の得点を、大学学長の決定によって繰り越すことが認められる。

なおバック合格者ではないが、法学系の教育・研究単位において、2年間法学を履修した者に交付される法科適性資格証書 (certificat de capacité en droit) の取得者の場合には、この試験の国語科目が現代外国語科目のいずれか一科目の試験に合格した場合に限り、高等教育における法学履修にあたって、バカロレア資格免状を取得していなくても、とくにバカロレア資格免状取得者と同じ扱いを受けることができるのである。

その場合には、もし必要があれば、大学の新学年度の開始前に、法科適性資格証書取得者だけを対象として特別試験 (II, 18) を行うことができるのである。

(四) 試験の実施方法 試験の実施にあたって、大学学長は、試験実施日の少なくとも九カ月前に、試験科目、試験期日などを、試験委員会からの勧告を経て公示しなければならない。

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

大学は特別大学入学試験事務局を設置することができる。

試験委員会は、受験者の受験資格についての適格判定を行う。受験者は四カ年を限って、特別大学入学試験における各試験科目の合格点を順次に繰り越すことができる。

所定の四科目の試験に合格した者に対して、特別大学入学試験合格証書が交付される。

大学学長は、特別大学入学試験合格者名簿を作成し、その名簿を当該大学を管轄する大学区総長のもとへ送付しなければならない。

なお特別大学入学試験の実施責任者には、国民教育省高等教育局長、大学区総長、大学学長をもって充てることが、一九八六年一〇月一日付けの官報の中で公示されている。

#### 四 一九八三年以降の大学入学資格試験制度の運営の実情

##### (1) 普通バックの受験の手順

リセの第二学年末の時点で、バックの予測試験として、まず「国語」の試験を受験しなければならない。この国語予測試験は、一九七〇年度から実施されているが、本試験の一年前のリセ第二学年（正式の呼称は第一学級）の所定国語科教育課程を試験の対象にしている。

これは受験者に対して本試験の学力水準に照らして、どれくらいの学力程度があるかを予測させるというねらいをもった予備試験的性格のものであると同時に、次年度の受験者の受験準備の負担を軽減させ

る措置の一環である。

この予測試験の成績は翌年度のリセ第三学年末に受験する本試験の成績の合計点に算入される。

予測試験の受験者は、受験年度の一月三十一日現在で満一六歳に達していなければならない。したがって本試験の受験者は受験年度の一月三十一日現在で満一七歳に達していなければならないということになる。

年令制限は下限だけが定めてあり、上限についてはなんらの規定もないから、本試験は一七歳以上であれば、何歳で受験してもよいのである。下限についても、とくに英才であって、跳び級によって所定の学力水準を満たしていると認められる場合には、所轄の大学区総長に年令制限免除の申請を行うことができる。

なおバックの本試験の受験機会は、受験者の生涯において二回戦までである。したがってリセ第三学年末に、「合格未決定者」(ajourné)として落第した場合には、もう一回挑戦することができるが、二回目にも合格しなかった場合には、生涯にわたって「バシユリエ」(bachelier)という称号とは縁がないということになる。

本試験の受験者は、受験前に就学していたリセの所在地の県試験場で受験する。ただしリセに就学していない成人が受験する場合には、本人の居住県の試験場で受験する。なおA科三類文学・芸術学科とF科一類音楽学科器楽専攻、同一一類乙舞踊専攻の受験者は、国民教育大臣の指定する試験場で受験する。

試験時期は通常は学年度末の六月下旬である。試験には定期に実施

される必須科目試験と、臨時に実施される一、二科目対象の自由選択科目試験とがある。

## (2) 普通バックの必須科目試験

必須科目試験は二群に区分されている。第一群試験は筆記試験と口述試験がある。普通バックの場合には、第二群試験では、第一群試験の対象となった筆記試験科目の中から、受験者自身で調整試験として二科目だけの口述試験だけを選択して受験する。

通常はリセ第二学年末に受験した「国語」には筆記試験もあるから、この「国語」と、リセ第三学年で履修した「哲学」の二科目の口述試験か、または文科系の受験者であれば、「国語」と「歴史・地理」の二科目か、理科系の受験者であれば、「国語」と「数学」の二科目か、「数学」と「物理学」の二科目のそれぞれの口述試験を受験することになる。

なお「外国語」は第一群試験では口述試験だけであるから、第二群試験において選択して受験することはできない。

この第一群試験と第二群試験の性格は異なる。第一群試験は受験者の専攻学科の主要必修科目についての筆記と口述の試験であり、学力優等者を合格者 (bachelier) と決定し、また学力劣等者を落第者 (recalé) としてふり分けるためのものである。

第一群試験の受験後に、必須科目についての筆記と口述の試験の成績は、二〇点満点で採点される。平均八点以下の得点者は落第である。落第者は毎年受験者全体の二五パーセントに達している。毎年の受験者は三八万人であるから約一〇万人が落第者である。

平均一〇点または一〇点以上の得点者は、第一群試験の成績だけで、バックの合格者となる。二〇点満点に対して八点と一〇点の間の得点者は合否すれすれの線上にある。しかしまったく合格の可能性がないというわけではない。普通バックの受験者の場合には、自分の一番強い科目を二科目だけ選択して、その科目の口述試験を調整試験として受験することができる。したがって第二群試験は、「調整口述試験」(l'oral de contrôle) (9, 10)と呼ばれている。

この第二群試験の結果、毎年四人のうちほとんど三人が合否すれすれの窮地から合格者として復活している。それゆえ第二群試験は、第一群試験の試験官とたまたま肌の合わなかった受験者に対して、救出の機会を提供することになるのである。

ほとんどすべての受験者が、第二群試験の調整口述試験科目の一つとして、「国語」を選択しているが、第二群試験での国語の配点指数は筆記と口述の配点指数を合計した数字であるから、例えばA科一類文理学科の場合には「国語」の配点指数は5になるのである。

第二群試験の調整口述試験において、受験者が不利となることは何もない。なぜなら第一群試験と第二群試験のそれぞれの得点のうち高い方の得点が、最終合否判定の時に算入されることになっているからである。例えばC数学・物理学科の受験者が、第一群試験の数学の筆記試験で二〇点満点のうち不幸にして三点の得点であったとする。しかるに第二群試験の数学の口述試験では、六点の得点を取った。それゆえ二〇点満点に対して三点が加算されることになる。

バックC科での数学の配点指数は五であるから、換算すると数学の

一〇〇点満点に対して一五点が加算されることになる。しかし、もし第二群試験の数学の口述調整試験の得点が二点であったとすれば、その場合には第一群試験での数学の得点の三点を算入することができるのである。

### (3) 体育科目試験

必須科目の体育には配点指数は適用されない。体育では平均一〇点を取得すれば合格点に達しているのであるから、一〇点を越える得点は、最終の合否判定の成績には算入されない。ただし最終の合否判定において、二〇点満点で一六点以上の秀、また一四点以上で一六点未満の優の評点で合格した者に対しては、体育試験の一〇点を越える点数、例えば体育の得点が一八点であれば、八点が最終判定の成績に加算されるのである。

もし体育の得点が一〇点以下であれば、一〇点との差だけが減点される。ただし合否すれすれの受験者に限って、出身校での体育授業精勤証明書を提出すれば減点されない。

### (4) 自由選択科目試験

リセの第一学年教育課程には、「第41表」に示す通り、共通必須科目の七科目のほかに、選択必修科目としてA群が四科目、B群が一四科目、また自由選択科目として一四科目が配当されている。

これらの自由選択科目のうち、バックの自由選択科目としてあげられているものは、「第42表」に示す通りである。

受験者はバックの自由選択科目試験として、二科目に限り自分で選択して受験することができる。第一群から一科目と第二群から一科

【第41表】 1983年以降のリセオ1学年の過当り授業時数

教 科 目			時 数	備 考
必修科目	共通必修	国語・歴史・地理・公民	5	( )内は24人以下の学級編成 ( )内は実験実習に相当する。
		第1現代外国語	4	
	選択必修	数学	3	( )内は実習に相当する。 1科目だけ選択する。
		物理	4 (1)	
		自然科学の科学	3 1/2 (1 1/2)	
		体育・スポーツ	2 (1 1/2)	
		工業技術	2	
		社会医療技術	(5 1/2)	
		応用芸術	各11 (9) (6) (6)	
		郡11		
	必修科目	B <sub>1</sub> 郡	経済学・社会学入門	2
		B <sub>2</sub> 郡		
		郡2	ラ第2	各3
		郡4	テリシヤ語初級	各5
		郡11	ン方語初級	各4
		郡7	第2外国語初級	各2
		郡11	第2外国語初級	2
自由選択科目	合 計		23 1/2 ~ 34 1/2	
自由選択科目	自由選択教科	ラ第2	テリシヤ語初級	各3
		郡2	ン方語初級	各3
		郡4	第2外国語初級	各5
		郡11	第2外国語初級	各5
		郡7	第2外国語初級	4
		郡11	第2外国語初級	各3
		郡11	第2外国語初級	2
		郡11	第2外国語初級	
		郡11	第2外国語初級	
		郡11	第2外国語初級	

目の合計二科目か、それとも第二群から二科目を選択して受験することが出来る。ただし必須科目試験として受験して合格した科目を、自由選択科目として再度受験することはできない。

自由選択科目の二科目の試験の得点は、それぞれ二〇点満点に対して一〇を越える得点、すなわち一六点の得点であれば六点だけが、最

最終合否判定時の成績に加算されることになっている。

なお必須科目試験と自由選択科目試験において、「現代外国語」に指定されている言語は、次に示す通りである。

ドイツ語、アムハラ語（セム語系言語でエチオピアの公用語）、英語、口語体アラビア語、文語体アラビア語、アルメニア語、ベルベル



〔第42表〕 普通バックの自由選択科目試験

種別	試 験 科 目	配点指数
オ 一 群 試 験	音 楽 教 育 造 形 芸 術 動 専 門 ス ポ ツ 活 工 作 ・ 技 術 教 経 済 学 ・ 社 育 経 済 学 ・ 理 学 物 然 の 科 学 自 然 術 学 技 テ ン 学 ラ リ シ ャ 語 ギ 代 外 国 語	
オ 二 群 試 験	口 地 方 語 ・ 地 方 の 方 言 述 現 代 外 国 語 古 代 語 ( ギ リ シ ャ ま た は ラ テ ン 語 )	

語（北アフリカに古代から住んでいる人種の言語）、カンボジア語、中国語、デンマーク語、イスパニア語、フィンランド語、現代ギリシヤ語、現代ヘブライ語、ハンガリー語、アイスランド語、イタリア語、日本語、ラオス語、マダガスカル語、オランダ語、ノルウェー語、現代ベルシャ語、ポーランド語、ルーマニア語、ロシア語、セルビア語、スウェーデン語、チェコ語、トルコ語、ベトナム語の三一カ国語である。

地方語および地域方言とはバスク語、ブルトン語、カタロニア語、コルス方言（コルシカ島方言）、ガロ・オック語（南フランス方言）、タヒチ語の六つの言語である。

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

これらの現代外国語、古代ギリシヤ語、古代ラテン語、地方語および地域方言の試験はすべて口述試験だけである。

フランスのリセ生徒が実際に履修している現代外国語はドイツ語や英語が多く、次いでイタリア語、スペイン語などである。ただし日情報処理技術学科だけは、とくに英語が指定されている。

日本語もバックで受験できる現代外国語のなかに入っている。実際に日本語で受験する場合には、管轄大学区に日本語に有能な試験官が居るかどうかが条件になる。したがって日本語やベトナム語のような稀少言語で受験を希望する受験者は、受験年度の一月の登録時に受験可能な現代外国語の一覧表をあらかじめ閲覧して確認しておくことが必要である。日本語はタヒチ島のリセで履修されている。

(5) 英語、数学、歴史・地理、国語科目の試験問題

フランスでは全国を大学区（アカデミー）と呼ばれる二六の地区に分けて、大学区別にバックの試験問題が作成される。

毎年九月以後、リセ第三学年担当教員が試験問題の作成を依頼される。一二月中旬に試験問題が収集される。大学区総長は試験問題作成委員会を招集する。試験問題は本問題と予備問題の二種類が用意される。試験問題作成委員長と大学区総括視学官とリセ教員の三人が、試験問題の模範解答をあらかじめ作成しておくのである。

パリ大学区の一九八二年六月のバックA科英語試験問題は、出典が英国の代表的新聞「タイムス」の「付録・教育特集」のなかの署名入りの長文である。受験者は試験官から英語で四問を質問されるが、英語で口答で答えるとともに、さらに長文の四節の中の一節についてフ

ランス語で訳して、口頭で答えることになっている。

試験時間は二〇分間であるが、そのうちの半分の一〇分間は準備時間に充当され、あとの一〇分間は、試験官から英語で質問があつて、受験者はその質問に対して英語を使って口頭で答えるのである。したがつて日本の英語科の筆記試験とちがつて、口述試験だけであるから、英語の長文を読み取り、試験官の英語による質問を聞き取つて、英語の口述によつて答えなければならぬのである。

カーン大学区の一九八三年六月のA科の数学の筆記試験問題は、〔第43表〕に示す通りである。

〔第43表〕カーン大学区のA科数学試験問題（1983年6月）

1. 次の式を展開せよ。

$$(x+1)(x-4)$$

2. 上を用いて、次の方程式、不等式を解け。

$$a) x^2 - 3x - 4 = 0$$

$$b) x^2 - 3x - 4 < 0$$

3. 次の方程式の解を求めよ。

$$a) e^{4x} - 3e^{2x} = 4$$

$$b) 2^{2x-2} - 3 \cdot 2^{x-2} - 1 = 0$$

4. 次の方程式の解を求めよ。

$$(\log_2 x) - 3 \log x < 4$$

パリ大学区の一九八二年九月の全科共通の歴史・地理科目の筆記試験問題は、次に示す通りである。

〔歴史〕

つぎの三問のうちから一問を選択せよ。

(一) フランスにおける人民戦線

(二) 新経済政策

(三) 一九一八年から三三年一月までのドイツにおける民主的経験とその限界

(四) の問題については、一九二一年六月一三日の第三回世界共産党大会のためのレーニンの綱領案が二、三にわたつて示され、つぎのような質問がつけられている。

① 一九二一年のレーニンの政治責任は何であつたか。

② 一九二二年春のロシアの内部状況はどうであつたかを説明せよ。

③ あの種の措置が資本主義への譲歩とみなされるのはなぜか。

④ レーニンはいかにして経済の社会主義的統制の可能性を守ろうとしたか。

〔地理〕

つぎの三問のうちから一問を選択せよ。

(一) アメリカの農業（添付の白地図使用可）

(二) ドイツ連邦の人口

(三) 日本の経済発展（添付の白地図使用可）

(四) の問題には、三〇年前からの人口、出生率、男女別年齢構成図、移出入数の各統計が示され、つぎのような質問が手がかりとしてつ

ている。

- ① 第二次世界大戦後のドイツ連邦共和国の人口の伸張を説明せよ。
- ② 年令構成の不規則性をいかに説明するか。

- ③ 人口の伸長のなかの移入民の部分はどれくらいか。

もし受験者が、(三)日本の経済発展という問題を選択した場合には、(二)の問題に対する手がかりを参考にして、問題文を「一見したところはやかな日本経済の現状は、実際は砂上の楼閣なのではないか」(9, 110)というように疑問文に代えて、日本のエネルギー資源の状況、創造的技術の開発力の程度と見通し、社会資本とくに住宅などの国際比較から、起承転結、首尾一貫、画竜点睛をふまえた論旨を述べていくことが期待されているのである。

一九六七年度のモンペリエ大学区の哲学科の筆記試験問題は、全部で三問あり、そのうちの第三問(6, 116)は次に示す通りである。

「科学史上、二〇世紀に比肩しうる時代はほとんどない。しかしながら科学の知識と威力の増大は、科学者の責任を重大にしたのである」というボーアの所見について説明し討議せよ。

この問題には、次のような手がかりがつけられている。

デンマークの偉大な原子核物理学者ボーア (Bohr, N., 1885-1962) は、一九二二年度ノーベル物理学賞の受賞者であり、アインシュタインやそのほかの原子核分裂現象の発見に参加したすべての物理学者と同じように、科学者の責任をよく自覚していたのである。

- ① ボーアの所見を説明し論証せよ。

最近のフランス大学入試制度の改革についての一考察

- ② 科学者はすべての責任を負わなければならないかについて討議せよ。

- ③ 科学者としてどのような責任を負うことが、理想的な態度であるといえるか。

- (6) 哲学科目試験

ラテン語と並んでフランス中等教育の大きな特質の一つとして、「哲学」が最終学年で教えられていることがあげられる。ナポレオン一世によって、国立中等学校(リセ)が「帝国を支える優秀者の養成機関」として設立されて以来、哲学教育はその後の幾多の政変にもかかわらず、つねに中等教育のしめくくりとしての役割を果たしてきたのである。

現在の哲学教育の基本的精神は、ほぼ第三共和政(一八七〇—一九四〇年)時代に中等教育界に定着したと考えられる。当代における哲学教育は、神と国王という在来の権威を否定し、良心の自由と理性の崇拜をその根本に置くことにより、民主主義国家としての第三共和国政治体制を知的に担う、自主的判断力を身につけた公民の養成をその任務としていたのである。

国立中等学校における哲学級は、第二帝政初期の一八五二年にいったん廃止されたが、ナポレオン三世が権威主義的帝政から自由主義的帝政へと政策転換をよぎなくされるとともに、一八六三年に再建され、以後今日まで存続することになる。

この一八六三年という時点では、国立中等学校の最終学年は哲学級一本であったが、一九〇二年には数学級が哲学級と並行して立てられ、

二本立てとなるのである。一九四二年には後になって「実験科学科」と改称された「哲学・科学級」が付加されて三本立てとなった。

一九八三年の時点では、哲学級、数学級などの名称は表面上は消え、最終学年はA科一類文理学科、二類文学・外国語学科、三類文学・芸術学科、B経済学・社会学科、C数学・物理学科、D数学・自然の科学科、D'農学・技術学科、E数学・技術学科の八学科に分けられている。このうち従来の哲学級に相当するのはA科の三学科であり、また従来の数学級の衣鉢を承け継いでいるのはG数学・物理学科である。

一九八三年以降のリセの最終学年の各学科における哲学の過当授業時数は、「第44表」に示す通りである。

〔第44表〕1983年以降のリセオ3学年と哲学の過当り授業時数

科	類	学 科	授 業 時 数
A	1	文 理 学 科	各 8
	2	文 学 ・ 外 国 語 学 科	
	3	文 学 ・ 芸 術 学 科	
B		経 済 学 ・ 社 会 学 科	5
C		数 学 ・ 物 理 学 科	各 3
D		数 学 ・ 自 然 の 科 学 科	
D'		農 学 ・ 技 術 学 科	
E		数 学 ・ 技 術 学 科	
F	6	化 学 科	各 2
	7	生 化 学 ・ 微 生 物 学 科	
	72	生 化 学 ・ 細 菌 学 科	
	8	社 会 医 療 学 科	3
	11	音 楽 学 科 舞 踊 専 攻	4
	12	美 術 学 科	3
G	1	経 営 事 務 処 理 技 術 学 科	各 2
	2	簿 記 経 理 学 科	
	3	商 業 技 術 学 科	
H		情 報 処 理 技 術 学 科	

A科の三学科における哲学の過当り授業時数は八時間であり、他の学科と比べると2倍または4倍になっている。

哲学の教育内容についてみると、国立中等学校の哲学級は、一八〇二年に国立中等学校の最上級学年として復活したが、当初は「論理学と倫理学」の二科目しか配当されていなかった。一八〇九の規定によれば、「哲学級では、生徒は国語またはラテン語によって論理学、形而上学、倫理学の諸概論および諸哲学者の学説史を学ぶ」とされている。

この十九世紀初頭の規定に記されている論理学、形而上学、倫理学の三本の柱に、その後学問として独立した心理学が十九世紀中葉に加わり、以後一九六〇年まで百五十一年間、哲学教育の教育課程の根本は変わることなく、この四本の柱で組み立てられたのである。

一九六〇年の改定で、この四本の柱は表面的には姿を消し、「認識」と「行動」という二つの大枠の下に指導内容が再編成されることになった。しかし内容的には旧来の論理学、形而上学および心理学のうち記憶、知覚、想像力、知性など認識能力を取り扱う項目が「認識」の部に入れられ、そして論理学および心理学における意志、習慣、情念など、人間の行動に直接結びつく項目が「行動」の部に入れられており、従来の伝統は十分に継承されている。

一九七四年以後、この「認識」、「行動」という枠組は「人間と世界」、「認識と理性」、「実践と目的」、「人類学・形而上学・哲学」というわく組にとって代われているが、このうち最初の三つがそれぞれ旧来の心理学、論理学、倫理学にだいたい対応しているのである。

一九八三年以降の哲学科目の内容構成は、次に示す通りである。

(一) 人間と世界

意識、無意識、欲求、情念、錯覚、他者、空間、時間、知覚、記憶、死、実存、自然と文化、歴史

(二) 認識と理性

言語、想像力、判断力と観念、科学的観念の形成(事例による)、理論と経験、論理と数学、生の認識、人間科学の形成(事例による)、非合理性、感覚、真理

(三) 実践と目的

労働、交換、技術、宗教、社会、国家、権力、暴力、法、正義、義務、意志、人格、幸福、自由

(四) 人類学・形而上学・哲学

一八〇九年の規定にみられる「諸哲学者の学説史」といういわば哲学史概説にあたる部分は、一九〇二年まで存続するが、それ以後、この部分はむしろ代表的哲学者の主要作品の講読という形式に置き代えられている。

これは諸思想の要約のつなぎあわせという抽象的で無味乾燥な形式に堕しがちな哲学史という形式より、若い哲学履修者を大哲学者の原典に直接接触させる方が有効と考えられているからである。

A科一類文理学科、A科二類文学・外国語学科、A科三類文学・芸術学科では、この哲学の原典講読は三冊である。B経済学・社会学科では原典講読は二冊である。そのほかの学科では哲学の原典講読は一冊である。

なお同一年度に二冊の原典講読を行う場合には、そのうちの一冊は次に示す名列表の中の星印の哲学者の原典でなければならない。

(一) 古代・中世

★プラトン (前427—347)★アリストテレス (前384—322)★エピクロス [前342 (41) —271 (70)]★エピクテトス (55頃—125頃)★マルクス・アウレリウス (121—80)★聖アウグスチヌス (354—430)★トマス・アクィナス [1225 (27) —74]

(二) 近世

★デカルト (1596—1650)★パスカル (1623—62)★スピノザ (1632—77)★メルランジュ (1638—1715)★ライブニッツ (1646—1716)★モンテスキュ (1689—1755)★ヴォーム (1711—76)★ルソー (1712—78)★カント (1724—1804)

(三) 近現代

★ヘーゲル (1770—1831)★コント (1798—1857)★クルーノ (1801—77)★キルケゴール (1813—55)★マルクス (1818—83)★ニーチェ (1844—1900)★フロイト (1856—1939)★フロイト (1856—1939)★フッサール (1859—1938)★ベルグソン (1859—1941)★アラン (1868—1951)★バッシュラール (1884—1962)★メルロ・ポンティ (1908—61)★サルトル (1905—1980)★ハイデッガー (1889—1976) もちろん、これら数多くの哲学者の著作を幅広く学ぶことが要求されているわけではない。前記の名列表から、A科では三人、B科では二人、そのほかの学科では一人を選んで、その代表的な著書を一冊通

読することが最低条件として要請されている。

なお技術バックのF科、G科、H科では、哲学の学習内容の項目は、自然、芸術、技術、歴史、法、自由、意識、理性、真理の九項目に軽減されている。

この哲学教育の指導目標は、将来多様な道を歩む青年が、人生の途上で種々の問題に直面した時、それらの問題を根源的にとらえ直し、理性の立場に立ちながら、自由に自覚的に思索を営みうるよう訓練する点にある。

ところで、このような思考法を生徒に身につけさせる最適の方法は、教師がそのような思考法を実践することにある。それゆえ、哲学教師には伝統的に大幅な教育の自由が認められており、前述の学習内容のどこに重点を置き、また、どのような方法で教えるかというようなことは、各教師の自由裁量に任されている。

また個々の問題について、教師が自己の意見を述べるのも自由であり、むしろ教科書に捕われずに、自己の信念を積極的に表明することが奨励されている。他方また生徒が積極的に課業に参加するように求められ、また生徒が自己の意見を明晰な形で表明する場として、「論文」(Composition)が大きな役割を占めているのである。

もともと哲学とは何かという問題それ自体哲学することであるといわれ、あらかじめ哲学とはしかじかであるということは、形式主義として戒められてきたのである。

現代生活では、人びとは既知のものか自明なものとして暗黙のうちに認められている情報によってしか考えないし、判断しようとしな

い。ある人が「彼女は美しい」とか、「彼女は上品である」とか、「彼女は賢い」とかいふ時、その人は自分自身の判断基準を既に持っていることを言外に示しているのである。

しかし実際に、ある特定の人の真、善、美の程度を評価することができるのは何かという問題から哲学は始まるのである。哲学の使命はつねにあらゆる既成概念を吟味することにある。哲学はあらゆる既成概念を破壊するのではなくて、そのような既成概念が成立した根拠は何かとか、それとは別個のやり方でなぜ考えることができなかったのかということをおもひかへて考えるのである。

バックの第一群試験では哲学は筆記試験だけである。哲学の試験問題は通常三問がある。そのうちの二問は自由記述式の論文式問題である。

例えば、(一)愛するということは理性的であるといふことができるか、(二)神なしで生きることができるか、(三)自己意識は存在することができるか、という三問から二問を選択して解答するのである。

もう一つの問題は、哲学の原典の中から一五行ぐらいの短文が提示せられ、短文における哲学的論旨を系統的に要約せよという哲学者指定方式の論文問題である。

もちろんどの教科目を通してでも、思索力の鍛練はできるのであるが、哲学は客観的な世界を対象とする他の諸科学とは異なり、人間の営みそのものを反省的にとらえることを大きな目的としているので、やはり考えるとはいかなることかを、青年に自覚させる良い修練の場となるのである。

したがって哲学教育がリセの最終学年に配当されているのも、それまでばらばらに個別的な知識として教えられてきた諸教科目に特徴的な思考法を、哲学教育を通じて反省的にとらえなおし、人間の精神の営みの特徴を総合的に、統一的に生徒に自覚させるためであるということができるのである。

#### (7) 技術バックの採点方法

技術バックの場合には、必須試験は一般教育科目と専門職業教育科目の二種類がある。一般教育科目と専門職業教育科目の各配点指数はほぼ同じであり、平均配点指数は一般教育科目で一二、また専門教育科目で一四である。

技術バックでは、一般教育科目の成績と専門職業教育科目の成績の平均合計点が二〇点満点に対して一〇点以上である場合に合格と判定される。以前では、一般教育科目の得点と専門職業教育科目の得点が、それぞれ一〇点以上でないと合格にならなかったが、今日では一般教育科目と専門職業教育科目の両方を合わせて平均一〇点以上が合格となるのである。

技術バックの自由選択科目は一科目だけである。美術教育、第二現代外国語、地方語、地域方言、社会・家庭経営学、音楽教育（F科一類音楽学）、速記術（F科八類社会医療学科のみ）の七科目である。速記術とは速記者兼タイピストが耳で聞いた話を速記し、速記したものを即時にタイプライターで打ちこむ技術である。医療または社会福祉関係の書類の要点を耳で聞いて速記で書き取る。書き取りの速度は一分間に約七五字である。速記術では書類の要点を耳で聞いて、

一分間に七五字を速記し、それを三〇分間でタイプライターを操作して打ちこむことができればならない。

自由選択科目の得点は、二〇点満点のうち一〇点を越える得点だけが、最終判定成績の合計点に加算される。

技術バックでは、第二群試験は一般教育試験科目と専門職業教育試験科目に分かれており、一般教育試験科目は口述試験だけであるが、専門職業教育試験科目は筆記試験、口述試験、実技試験の三つである。

#### (8) バックの追試験

やむをえない事情によって、六月の学年度末にバックを受験できなかった者は、九月の追試験を受験することができる。その場合には六月までに行われていた体育と自由選択科目の試験の成績は繰り越すことが認められている。

九月のバックの追試験は、六月のバックの試験に受験登録していた者で、正当に証明された不可抗力の事情（病気、事故、忌引き）によって欠席した者だけを対象とする。

六月のバック試験の全部を欠席した者は、欠席の証明書をつけて、管轄の大学区試験場に通知する。試験委員会は書類を審査した後に、大学区総長に九月の追試験に受験登録することを提案する。大学区総長は受験者に九日の追試験の受験許可を通知する。

六月のバック試験の一部だけを受験していた者で、残りの試験を受験しなかった者は、不可抗力の事情を証明する書類とともに、六月に受験した試験科目の平均点が二〇点満点に対して八点以上の場合のみ、九月の追試験を受験することができる。もし受験者が六月の試験

期に、第一群試験の全部の科目に合格している場合には、第二群試験だけを受験することになる。

国語予測試験には筆記と口述の二種類の試験があるが、どちらか一つに合格していて、他の一つを欠席した場合には、九月の追試験の時に、残りの一つだけを受験することができる。

#### (9) 体育・スポーツ教育科目の採点方法

体育・スポーツ教育科目は、一九八四年以降、技術バックの第一群試験に加えられた。体育・スポーツ教育科目の採点方法は、次に示す通りである。

##### (一) 運動能力（総点の四分の一を配点する）

徒走、砲丸投げ、跳躍、綱登りなどの運動能力を全国平均体力検定表にもとづいて機械的に採点する。

##### (二) 社会的、感情的行動能力（総点の四分の一を配点する）

所定の行動能力検定表にもとづいて、合格点に達するまで何回でも挑戦することができる。

##### (三) 技術的、心理的知識（総点の四分の一を配点する）

年齢別発達段階検定表にもとづいて機械的に採点する。

##### (四) 運動・行動・認識（総点の四分の一を配点する）

身体的能力、集団的行動能力、集団的認識能力の各検定表にもとづいて採点する。合格点に達するまで何回でも挑戦することができる。

#### (10) 試験委員会

試験委員会 (jury) (9, 131) ということには、受験者に試問する試験官という意味と、受験者の答案や、口頭での答弁を採点する採

点者全員という意味が含まれている。

受験者の合否判定にあたって、(一)平均八点以下、(二)二〇点満点で一点の壁を文句なしに突破した者、(三)平均八点ぎりぎりの者、(四)一点すれすれの者の四つの場合に区分する。

試験委員会は、(一)を落第者とし、(二)を合格者とした後で、(三)と(四)について協議する。

協議にあたって、試験委員会の合否判定資料は、試験での成績と出身校内申書である。ただし出身校内申書を提出するかどうかは受験者本人の自由である。

出身校内申書が提出されている場合には、試験委員会は内申書を審査する。例えばA科一類文理学科の最低合格点二三〇点に対して、受験者の得点が二二六点である場合には、内申書で「歴史・地理」が第三学年において精勤し好成績をあげているならば、「歴史・地理」担当採点者は四点を加点して、最低合格点に到達させるのである。いずれにせよ、わずかに二〜三点の差でバックに落第させるといふようなことはしない。採点者はできるだけ受験者を合格させようと、あの手この手を駆使しているのである。

採点者には、第二段階第二期教育課程(リセ)において当該科目を担当している教員が任命される。例えばリセA科第二学年担当教員は、同F科または同G科の採点者には選任されない。もちろん採点者は自分が担任した学級の生徒の答案や答弁を採点することはできない。そのため六月のバック試験期には、パリ市のリセ教員がベルサイユ市の試験場へ移動したりする。



リセ第二学年末のバック国語の筆記試験の答案の採点にあたっては、採点者は一人あたり一二〇枚か一五〇枚か二〇〇枚を自宅で採点している。

試験委員会は、第一群試験だけで二〇点満点に対して一〇点以上の者、また第一群試験と第二群試験において同一科目については上位の得点の平均合計点が、二〇点満点で一〇点以上の者を合格者として決定する。

第一群試験の一発だけで合格した者の成績の評点は、二〇点満点のうち一六点以上の者は秀、一四点以上一六点未満の者は優、一二点以上で一四点未満の者は良、一〇点以上で一二点未満の者は可である。なお第二群試験を受験して合格となった者の評点は、平均点のいかににかかわらずすべて可である。

#### (II) バック合格証書 (バシユリエ学位記)

大学区総長は国民教育大臣の委任により、合格者に対して第二段階教育大学入学資格学位免状、また技術者大学入学資格学位免状を授与する。この免状は高等教育において履修登録する場合に「旅券」(passeport) (9, 131) の役割を果すのである。

バック免状の効力は評点のいかににかかわらず生涯にわたって全国いずれの国立大学においても同等である。毎年約三十八万人の受験者のなかの約六〇パーセントから七〇パーセントの範囲が合格圏である。

大学区総長は、普通バックにおいて二〇点満点で平均八点以上で一〇点未満の成績の不合格者に対して、中等教育修了証書、略称CFESを、また技術バックにおいて同じ条件の者に対して専門職業中等教

育修了証書 (certificat de fin d'étude secondaires professionnelles)、略称CFESPを交付することができる。

この中等教育修了証書と専門職業中等教育修了証書の取得者、または中級技術者免状取得者と、三年以上前からバックを受験していない者は、一九六六年に新設された大学併設技術短期大学部へ進学することが出来る。

#### おわりに

バック合格者と高等教育との接続関係に簡単に触れることによって、この小論の結びとする。

バックに合格して国立大学に進学した者の約五〇パーセントは、なんらかの称号とか資格を取得している。バックに合格して、バシユリエという称号を取得しているだけでも、公職や企業への就職にあたっては権威のある免状の取得者として処遇される。

A科一類からH科まで全部で二五学科のバック合格者は、評点のいかににかかわらず全国に七五校ある国立大学の各教育・研究単位 (unités d'enseignement et de recherche)、略称ユニテに入學することが出来る。

このユニテとは一九七五年の高等教育基本法によって、文科系の学問と理科系の学問との有機的結合が可能となるように、約一〇〇の学部から構成された旧二三校の大学が、七四三の教育・研究単位から構成される五六大学に編成替えされ、その結果、パリ大学も一三校の分

科大学に再編成されたのである。

なお一九六六年（昭和四一年）に新設された国立大学併設技術短期大学部（二年制、七七校）と、県立師範学校（三年制、一五九校）もバック合格者に門戸を開放している。師範学校の場合には入学試験に合格しなければならぬ。師範学校卒業生は卒業成績順に公立小学校教員の欠員を補充していく特権を保障されている。

国立大学の始めの二カ年間は、第一期課程であり、修了者には「大学一般教育免状」（DEUG）が与えられる。第二期課程からは専門教育であり、文学系と理学系では一カ年で学士号、二カ年で修士号、法学系と経済学系では二カ年で学士号が与えられる。第三期課程は二カ年で試験と論文審査によって「専門博士号」が与えられる。

国家資格試験としては、「リセ・大学教授資格試験（アグレガシオン）」と「国家博士号」試験がある。アグレガシオンの合格者はアグレジェ（agrégé）と呼ばれ、リセと大学の教授の欠員を補充していく特権が与えられている。

アグレガシオン準備校として大学以上の社会的威信を有する大学院程度の高等師範学校（ENS）がある。高等師範学校や理工科学校（エコール・ポリテクニク）などの有名専門大学校（グラン・ゼコール）入試準備校として、リセ併設予備校がある。リセ併設予備科に進学するためには、文科系ではバックA科でラテン語を選択し、秀または優の評定の合格者、理科系ではバックC科で秀または優の評定の合格者がリセ校長、進路指導委員会の推薦を得なければならない。リセ併設予備科で二、三年間みっちり鍛えられてから、高等師範学校な

どの専門大学の入学試験を受験するのである。

因みにフランスの大学では修業年限だけ在籍していれば、トコロテンス式に進級し卒業できるというのではなく、履修科目ごとに合格証書を取得し、それらを合わせてなんらかの称号や資格に結びつけるのである。したがって履修登録学生の多い法学系などでは学士号を取得できる者は、履修登録学生総数の約二割ぐらいと推定されている。しかしフランス社会ではバックに合格しているという条件だけでも公職や企業の就職にあたって、高い社会的威信をもっているのである。

（一九八七・九・二稿）

## 参考文献

- (1) Piobetta, J. B., Le baccalauréat, 1937.
- (2) dito, Vues sur l'éducation française, 1940.
- (3) dito, Examens et concours, 1943.
- (4) dito, Éducation nationale et instruction publique, 1944.
- (5) Programme du baccalauréat de l'enseignement du seconde degré a partir de 1968, 1967.
- (6) Thoraval, J., Les épreuves du baccalauréat : Français 1967, 1968.
- (7) Charlot, M., Le sauvetage du bac : la réform Fontanet, 1974.
- (8) Echarde, R., Le Verger, J., Guide du candidat au baccalauréat de l'enseignement au seconde degré et à l'épreuve anticipée de Français, 1978.
- (9) Jacques, J. P., Bacs : mode d'emploi, 1983.
- (10) ONISEP, Les baccalauréat de technicien : F4 génie civil :

F9 énergie et équipement, 1984.

- (1) Que faire en droit avec le niveau du baccalauréat ?, Le Monde de l'Education, N° III—Decembre 1984.
- (2) Peciet, S., Que faire avec un bac A?, 1985.
- (3) Rochette, C., Togna, C., L'étude de cas au bac de technique administrative G1, 1985.
- (4) Enseignement supérieurs, B.P.n° 37—23 octobre 1986.
- (5) Lindecker, J., Que faire avec un bac C? 1987.
- (6) 手塚武彦「フランスにおける入試制度の特色」(『教育学研究』四二巻四号)一九七五年
- (7) 同 右「フランスの大学」(『学校の歴史』第四巻『大学の歴史』)第一法規、一九七九年
- (8) 宮脇陽三『フランス大学入学資格試験制度史』風間書房、一九八一年
- (9) 同 右「フランスにおける大学入学資格試験制度の現状についての一考察」(『佛教大学文学部学会『人文学論集第一七号』)一九八三年
- (10) 同 右「バカロレア資格試験の性格と現状」(国立教育研究所内フランス試験制度研究会編『フランス大学入試の改革動向』)一九八四年
- (11) 田崎徳友「バカロレア資格の取得をめざしての学習履修過程における進路指導」(前掲書)一九八四年
- (12) 油井澄子「一九八二年度バカロレア資格試験結果の分析」(前掲書)一九八四年
- (13) 手塚武彦「大学入試関係年表(一九七一年以降)」(前掲書)一九八四年
- (14) 国立教育研究所大学入試研究会「主要各国の大学入試の試験問題」(文部省科研費報告資料)
- (15) 井上星児「フランス」(海外教育事情研究会代表七田基弘編著『新しい世界の学校教育』)第一法規、一九八五(昭和六〇)年
- (16) 手塚武彦「フランス・バカロレア制度の特徴と改革」(中島直忠編著『大学入試』)時事通信社、一九八六年

【備考】文中の( )内の数字は文献番号と文献番号の引用頁数を示す。  
なお本稿は昭和六二年度文部省科学研究費補助金による「フランス教育の改革動向」に関するフランス教育学会共同研究報告の一部である。